

第 67 回 日本生殖医学会 学術講演会・総会

P-005

神奈川県 パシフィコ横浜,2022. 11. 3-4

演題名：当院における卵管鏡下卵管形成術(FT)の術後妊娠に関する後方視的検討：6004 症例の検討結果

村上 純子<sup>1)</sup>、小松原 千暁<sup>1)</sup>、藤岡 聡子<sup>1)</sup>、辻 勲<sup>1)</sup>、福田 愛作<sup>1)</sup>、森本 義晴<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> IVF 大阪クリニック <sup>2)</sup> HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】当院では卵管通過障害に対して卵管鏡下卵管形成術(FT)を施行し、自然妊娠を目指した治療を積極的に行っている。今回の研究の目的は、FT の術後妊娠について後方視的に検討することにより、卵管通過障害に対する FT の意義について考察することである。

【対象と方法】2001 年 5 月から 2020 年 12 月までの間に、子宮卵管造影検査にて卵管通過障害と診断され、FT を施行し術後一般不妊治療を行った 6004 例を対象とした。年齢や卵管通過障害の側性の違いが、術後妊娠率に与える影響について後方視的に検討した。

【結果】FT による卵管通過障害の改善率は 99.93%であった。FT にて卵管通過障害が改善された 6000 例の術後妊娠率は 24.86%であった。年齢別の術後妊娠率は、20 歳代が 33.29%、30～34 歳が 22.57%、35～39 歳が 22.57%、40 歳以上が 9.52%であり、40 歳以上は他の年齢層より低かった( $p<0.01$ )。術後妊娠率は 30 歳から低下し始め、40 歳以上でさらに低下した。卵管通過障害の側性別の術後妊娠率は、20 歳代では両側通過障害が片側通過障害より低かったが(30.70% vs 45.25%、 $p<0.01$ )、30 歳以上の年齢層では差を認めなかった。

【考察】卵管通過障害に対する FT は、20 および 30 歳代に有用であるが、40 歳以上ではその治療効果は限定的である。卵管通過障害の側性の違いによる FT の治療効果は、年齢によって異なり、20 歳代は影響を受けるが、妊娠率が低下し始める 30 歳以上は影響されない。この結果は女性の妊孕性が関係している可能性があると考えられた。